

蟬の声が耳にまとわりつく。

ジジ……ジジジ……と、ひととき大きく鳴く声が裏山から反響してきて、思わず眉をひそめた。セミたちはまるで、私の帰郷を歓迎するように騒がしく、息苦しいほどに鳴いている。いや、歓迎などではない。ただ、昔から変わらない田舎の「音」だ。

実家の門をくぐると、玄関前に敷き詰められたコンクリートの上に、真っ黒に干からびたミミズが貼りついていていた。思わず足を止める。日差しは容赦がなく、頭上からじりじりと照りつけてくるのに、風はまったく吹いてこない。熱気が地面からも立ち上り、鼻の奥が焦げたような臭いでひりついた。

見上げた空は青すぎるほど青く、けれどどこか遠く感じる。雲ひとつないくせに、閉じられた天井のような圧迫感があった。

家のまわりには背の高い雑草がわんさかと生い茂り、道を歩きたびに濃い緑の匂いが立ち上る。朽ちかけた納屋の屋根にはツタが絡まり、どこからか羽虫がぶんぶん飛び出してきた。蚊取り線香の香りが懐かしく鼻をつくとき、ここで暮らしていた頃のことを思い出す。湿気を吸った柱のにおいがしみついた、静かで、暑すぎる家。

兄の春臣はるおみがいた頃の記憶も、ここに染みついている。

そしてそれが、今ではもう、どれもこれも妙に遠くて、夢の中の話みたいだ。

玄関の引き戸は、手をかけた瞬間にぎい、と古びた音を立てて開いた。中から冷房の風が漏れてくるわけでもない。ただ、外の熱気よりほんのわずかに涼しい空気が、土間のあたりにたまっているだけだった。

「……帰ってきたんだな」

この村の村長の声が聞こえたのは、仏間の方からだった。

声に感情の波はない。ただの事実のように、淡々と告げられたその言葉に、どう返せばいいのか迷って、私は靴を脱ぐのに少し時間をかけた。

「はい」

返事をしながら廊下を進む。壁の板張りは湿気を吸ってやや膨らんでいた。ふと見ると、ふすまの隙間からはこりをまとった光が差し込んでいる。

仏壇の前に、村長がいた。黒い喪服のまま、まだ着替えていない。背筋だけは妙にまっすぐだった。

「……暑いですね」

私の言葉に、村長はわずかに頷いた。それきり沈黙が落ちた。

線香の煙がゆらゆらと立ちのぼり、すぐそばの天井に薄く曇りをつくっていた。

「……早いうちに整理して、帰りますから」

思いきつて口にする、村長の手がぴくりと動いた。香炉の灰をならす手が、少し震えたのがわかった。

「いや、それほど急ぐ必要はないよ」

村長はそう言う、家を出て行った。

村長は急ぐ必要はないと言ったが、私はここにあまり長居するつもりはなかった。

（春臣兄さん……）

ひとりきりになった家の中で、私は最後に見た兄の姿と、この村の奇妙な風習を思い出していた。

この村では、血の繋がったきょうだいでの性行為が推奨されていた。

同じ血を分けた二人が交わることで、完全な状態になれるというのがその言い分だった。きょうだいで体を重ねることができるのはこの村では最も幸せなことなのだ。しかしそんなこの村だけの常識は、外の情報が入ってくるようになった現代では通じない。少なくとも私はそう思っていた。

しかし兄は違った。

両親が相次いで亡くなり、二人だけになってしまった家で、兄は真剣な眼差しで

私に言った。両親の死で心が参っていたというのもあるのだろう。最も幸せなことだと言われたその行為に縋り付きたくなつたのかもしれない。けれど私は兄のその様子が怖くなつて、逃げるように村の外にある学校に進学した。そしてそれ以来、兄とは一度も顔を合わせることはなかつたのだ。

もう兄はいない。けれど兄の気配がまだ残る家には長居したくなかつた。ここにいるとどうしてもあの日のことを、兄を拒絶してしまつた日のことを思い出すからだ。遺品を整理したら家を引き渡してすぐに出るつもりだ。けれど今日は村に来るだけでも疲れてしまつたので、家の整理は明日にすることにして、私は兄の気配が残る家で眠ることにしたのだつた。

どれくらい眠っていたのだろう。

ふと、体の上に何かの重みを感じて目が覚めた。息苦しい。誰かが、私の胸の上に手を置いていたような、そんな感覚。

目を開けようとしたが、まぶたが重い。身体も動かない。金縛り……？

——違う。

手のひらが、じわりと胸のあたりを撫でている。服の上からではない。直接、肌に触れてくるような、ぬめるような体温。呼吸が浅くなる。怖い、と思うのに声が出せない。

その手はやがて、鎖骨をなぞり、喉元を這い、頬に触れた。指が細くて長い。どこか懐かしい。私はこの手を知っている――。

手はゆつくりと私の体を降りていき、服の下から肌に直接触れる。下着を少しだけずらされ、胸を揉まれた。その指先が胸の先をかすめたとき、思わず声が出た。

「……っ」

自分のものとは思えない鼻にかかった甘い声だ。まるで自分がそういう行為を望んでいるかのような。見えないものに乳首をつままれ、徐々にそこがピンと立ってきてしまう。指はさらにいたずらに動き、先端を摘まんで離しを繰り返す。

（嫌、だ……っ）

怖い。肌で感じるその指が兄さんのそれとよく似ている。兄はまだ私のことを諦めていなかったのだろうか？

――いや違う。これは兄ではない。だって兄は死んだはずだ。もうこの世にはいない人間だ。現実を受け入れなければと思うのに、どうしても頭が回らない。体が動かない分、脳が必死に逃げ出そうとしている。

「ううつ……！」

突然乳首に何かぬめるような感覚になり、思わず声が出た。

（まさか……舐められてる……っ？）

生温かい舌が乳首を押し潰すように舐めている。その感触に鳥肌が立った。

「あ、や……」

声が抑えられない。私はこんな声じゃないはずだ。けれど私の意思とは関係なく勝手に喉から漏れてしまう。まるで誰かに操られているかのように、自分の意志では指一本動かせなかった。

「う……ん、んっ」

舌は胸から脇へと場所を移していく。そしてまた胸を揉みしだきながら先端を執拗に責めたてた。

（なんで……っ）

なんでこんなことをするの。兄さん、やめて、と叫びたいのに声が出ない。

「春臣兄さん……っ」

思わず兄の名を呼んだときだった。ぴた、と舌が止まり、次の瞬間胸から離れたかと思うと、今度は下着に手をかけられた。腰を持ちあげられ、ずるりと足から抜き取られる。そして間髪を入れず、私の秘裂をなぞり始めた。

「……っ！」

私はもう声も出せなかった。見えない指がぬるりと侵入してくる。くちゅくちゅと卑猥な音を立て、浅いところを探っては敏感な部分を擦るように動く。

「……あっ！」

思わず声が出た。そして同時にその刺激で体に電気が走るような快感が駆け抜けたのだ。自分でするときとは比べものにならないほどの快感だった。私の中をかき回す指はさらに増え、ばらばらに動いてはその弱い部分を責め立てる。

「あ……っ、や……」

私はもう何も考えられなかった。与えられる刺激にただ声を上げるしかない。

「駄目……っ、あっ！」

少し上の方を擦られたときだった。私の腰はびくんと跳ね上がり、足の指がぎゅっと縮こまる。達してしまったのだ、と理解すると同時に羞恥で顔が熱くなった。それなのにまだ私の中をかき回す動きは止まらない。むしろ激しさを増していくばかりだ。

「んうっ！ ああっ！ あ、ああんっ」

何度も責められ、私はまた上り詰めさせられそうになるが、その度に指の動きが弱まったり止まったりして絶頂に達することができない。

「あ……、なんで……」

私は思わず声に出してしまった。するとそれに答えるかのように指の動きが再び激しさを増す。そしてまた上り詰める寸前で止められてしまうのだ。その繰り返しだ。

「やだあ、もう許してえ」

私は半泣きになりながら懇願した。けれどそれは聞き入れられず、何度も絶頂寸前まで押し上げられ、達する直前で刺激を弱められた。

「お願いだからあ……」

もう限界だった。頭がおかしくなりそうだと思ったとき、ようやく秘所から指が引き抜かれた。

（やつと……終わった……？）

しかし安堵するのも束の間だった。すぐに両足を持ち上げられ、大きく開脚させられる。そしてぬめるものが蜜壺を下から上になぞっていった。

「うあつ……」

指とは違う、温かくて柔らかいもの。舌だ。舌で舐められている。

「ん……っ」

まさかそんなところまでされるなんて思っていなかった私は動揺した。けれどや

はり身体は動かない。されるがままになっていると、今度は舌先が中に入ってくる感覚があった。そしてそれは徐々に深いところになで侵入してくる。

「あ、ああ……」

もう駄目だと思った瞬間だった。舌が引き抜かれると同時に再び指が二本同時に突き立てられる。

「ひうつ！」

突然のことに、私はまた悲鳴を上げた。さっきまでのゆつくりとした動きとは違い、一気に奥まで突かれる。

「あ！ ああ……っ」

そしてすぐに激しい抽送が始まる。ぐちゅぐちゅと水つぽい音が部屋に響き渡り、耳からも犯されていくようだった。

「あっ！ あうつ！ あああっ！」

もう何も考えられなかった。ただ与えられる快感に翻弄されるだけ。ずっと欲しかったものをようやくもらえたような充足感があった。しかしそれも束の間のことだ。絶頂に達しそうになった瞬間、指の動きが止まり、またゆるゆると浅いところを刺激される。

「やだあ、なんで……」

私はまた泣きそうな声で言った。もう本当におかしくなると思った瞬間だった。再び指が奥まで突き入れられると同時に、敏感な花芯を親指で押しつぶされる。

「っ！ あ、あ……っ！」

その瞬間、頭が真っ白になった。全身が痙攣するように震え上がり、背中が大きく仰け反ったかと思うと一気に脱力する。そして秘所から温かいものが溢れ出したのがわかった。

（私、お漏らししちゃった……？）

そんなはずはないと必死に否定するが、身体は言うことをきかない。

「あ……う……」

私はただ呆然としていた。身体はいつの間にか動かせるようになっていたが、起き上がることは出来なかった。

まさか、ここにまだ兄の幽霊がいるのだろうか。そして兄は、まだ私とひとつになることを諦めていないのだろうか。既に死んでいるというのにその妄執に囚われているとしたら——私はゾツとした。そして、早くここから出なければならぬと心に決めるのだった。

しかし私の決意とは裏腹に、遺品を整理し、家を掃除している最中に何者かの気配を感じた。ひやりとしたものが身体に触れたと思つた瞬間、それは私の肌の上をゆつくりと滑る。そして、まるで蛇が這うように首筋から胸元へと下りてきたのだ。「ひつ……！」

思わず声を上げてしまったが、すぐに自分の口を塞いだ。今この家には私一人しかいないはずだ。それなのに、この感触は一体なんなのか。恐る恐る振り返つてもそこには誰もいなかった。ただ薄暗い廊下が続いているだけだ。

（気のせい……？）

いや違う。確かに何かに触れている感覚があるし、今も見られている気がするのだ。私は恐怖でその場にへたり込んだまま動けなくなつてしまった。すると今度は背後から忍び寄る気配がある。首筋に生暖かい息がかつたかと思うと、ぬるりとしたものが私の耳の中に入ってきた。

「ひあつ！」

思わず声が出てしまったが、やはり誰もいない。私は混乱していた。すると今度は服の下に手のようなものが入ってきたのだ。それはゆつくりと這い回るように動き回り、やがて胸へと到達する。そしてそのまま胸を揉みしだき始めたのだ。

「あ……っ」

自分の口から漏れた甘い声に驚いた。見えないものにこんなところを触られて感じるなんてどうかしていると思ったけれど、体は正直だ。乳首を摘まれた瞬間、びっくりと体が跳ね上がる。

「あ……ん」

私は無意識のうちに腰を揺らして、もっと強い刺激を求めてしまっていた。するとそれに答えるように、今度は両方の乳首を同時にきゅつと引つ張られる。

「ああっ！」

強い快感に襲われて思わず大きな声が出た。しかしそれでもまだ足りないとかかりに指は動き続けるのだ。そしてついにその手は私の下半身へと伸びていった。下着の中に手が入り込み、割れ目をなぞるようにして上下する。

「んっ……」

最初はゆっくりとだったが、段々と激しくなっていく動きに翻弄されるしかなかった。そしてついにその指は私の一番敏感な部分に触れたのだ。

「ああっ！」

私はまた大きな声を上げてしまった。しかしそんなことはお構いなしに指先は容赦なくそこを責め立てる。

（だめ……このままじゃおかしくなる……！）

必死に抵抗しようとするが、力が入らない上に体の自由も利かない状態では何もできなかった。むしろ抵抗する意志とは裏腹に身体はどんどん高まってしまった。そしてとうとうその瞬間が訪れたのだった。

「あ、ああ……っ！」

びくんと大きく体が跳ねたかと思うと、目の前が真っ白になる。一瞬の間を置いてから全身から力が抜けていった。

「はあ……は……終わった……？」

私は安堵したのだが、それは束の間のことだった。今度は後ろから抱きつかれたような感触があったのだ。そしてそれと同時に足の付け根に何か熱いものが押し当てられるのを感じた。それはゆっくりと上下に動いている。まるで挿入を模しているかのような動きだった。

「……っ！」

それがなんなのか理解した瞬間、背筋が凍りついたような感覚に襲われた。

「や……やだっ！」

そう叫んだ瞬間、纏わり付いていた気配は消えていた。私はその場にへたり込んで呼吸を整える。

間違はなく何かがいる。早くここから出て行かなければ。私は改めてそう思ったのだった。

私は急いで荷物をまとめると、足早に家を出ることにした。まだ兄はこの家の中にいるのだろうか。家の中を一通り見て回ったが気配を感じることはなかった。

「……っ」

一瞬視線のようなものを感じた気がして振り返ると、そこには誰もいなかった。しかしやはり見られているような気がするのだ。私は足早に玄関へと向かう。一刻も早くこの場を離れなければと思ったからだ。だがその時だった。突然足を掴まれたかと思うと、そのまま引き倒される。

「きゃあ！」

受け身を取ることもできず床に頭を打ち付けた衝撃で意識を失いそうになったが、すぐに我に返ると慌てて体を起こす。するとそこには信じられない光景が広がっていたのだった。

「え……？」

私の足元には無数の手があったのだ。それは床から生えるように伸びていて、足首を掴むとそのまま這い上がってこようとしている。私は慌てて足をばたつかせて振り払おうとしたが、その手の力はとても強く振り払うことができない。その間にも手はどんどん増えていき、やがて全身を覆い尽くすように絡みついてくる。そしてついに身動きが取れなくなってしまうところで、今度は服の下にまで入り込んだのだ。

「ひっ……」

思わず声が出る。素肌の上を這う感触に鳥肌が立ち、全身が粟立った。

「や……めて……!」

身を振って抵抗するが、手の動きは止まらない。それどころかどんどん激しくなっていくばかりだ。やがてその手のひとつがスカートの中に入り込んできたかと思うと、下着越しに秘部に触れてきたのがわかった。

「あうっ!」

突然のことに驚きの声を上げると同時に体が跳ねる。まさかそんなところに触れられるとは思っていなかったからだ。しかしそれも束の間のことですぐに別の手が伸びてきて同じように触れてくるようになったのである。

「あっ! ああん!」

二本三本と数を増やしていく手に為す術もなく翻弄されるしかなかった。

「あ……っ、ふ……」

次第に頭がぼうつとしてくる。身体中が熱くなり、呼吸も荒くなっていた。するとそれに反応するかのように手の動きは激しさを増すばかりで一向に止まる気配がない。それどころかどんどんエスカレートしていく一方だった。

「やだあ……もう許してえ」

私は半泣きになりながら懇願したが、やはり聞き入れてもらえないようだ。むしろ逆効果になってしまったのかさらに激しくなる始末である。そしてついにその時がやってきたのだ。今までで一番強い力で陰核を押し潰された瞬間、目の前が真っ白になり意識が飛びそうになるほどの衝撃に襲われた。

「あああっ!!」

びくんと大きく体が跳ね上がり、背中が仰け反ると同時に全身から力が抜けていく。しかしそれでもなお手の動きが止まることはなかった。むしろより一層激しくなる一方だ。

「あ、ああっ!」

私はもう何も考えられなかった。ただひたすらに与えられる快楽を受け入れることしかできないでいたのだ。そしてとうとうその時がやってきたのだった。今まで

で一番大きな波が押し寄せてきたかと思うと同時に頭の中で何かが弾けるような感覚に襲われる。それと同時に私は意識を手放したのだった。